

V. 広報活動

霊長類研究所では、広報委員会が下記の広報行事を行って研究所の活動を所外の方々に紹介している。また、リーフレット・ホームページを通じても広報活動を行い、一般の方からの霊長類についての質問や、マスコミ取材の問い合わせにも随時対応している。

1. 公開講座

犬山公開講座「サルから知る」

2012年7月28日(土)、29日(日)に霊長類研究所で開催した。参加者は46名だった。4つの講義(辻大和「森にタネをまくサルたち:種子散布者としての霊長類の役割」、中村克樹「父親の子育て イクメンザルのコモンマーモセット」、古賀章彦「テナガザルのゲノムを見てヒトのゲノムを考える」、高田昌彦「サルから学ぶ脳の運動機能の不思議」)と、4つの実習(心理「チンパンジー観察」:友永雅己・林美里、生態「ニホンザル行動観察実習」:古市剛史、遺伝「味覚の個人差と遺伝子」:今井啓雄、形態「サルの骨格を観る」:江木直子)を実施した。

東京公開講座「霊長類研究の最前線」

2012年9月23日(日)、日本科学未来館のみらいCANホールで開催した。参加者は168名だった。4つの講演(平井啓久「チンパンジーにあってヒトにないゲノム不毛地帯の進化と意義」、橋本千絵「チンパンジーのメスの生き方〜野生チンパンジーの観察から」、友永雅己「チンパンジーのここを探る」、西村剛「日本最古のサル化石ーカナガワピテクスとニホンザルー」)を行った

2. 第22回市民公開日

2012年10月28日(日)に霊長類研究所で開催した。参加者は74名だった。松沢哲郎の講演「想像するちからーチンパンジーが教えてくれた人間の心」と所内見学を行った。

3. オープンキャンパス・大学院ガイダンス

大学の学部学生を主な対象として、大学院ガイダンスを兼ねた2012年度のオープンキャンパスを、2013年2月19日、20日に開催した。19日は、霊長類研究所にある10分科の教員による講演と、大学院生・研究員も参加した懇談会を行った。20日は、全員揃って所内見学をしたあと、それぞれの参加者が希望する二つの分科の研究室を訪問し、各分科の教員と懇談した。参加者は21名だった。

(文責:半谷吾郎)

VI. ナショナルバイオリソースプロジェクト(NBR)

1. ナショナルバイオリソースプロジェクト(ニホンザル)の活動

平成14年度から文部科学省により開始されたナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)の一環である。自然科学研究機構生理学研究所を中核機関、京都大学霊長類研究所を分担機関として、安全で健康なニホンザルを日本のさまざまな研究機関に供給することを目的として実施している。平成24年度より、第3期(5年計画)に入った。現在、350~400頭のニホンザルの3分の2を小野洞キャンパス(第2キャンパス)内で、3分の1を官林キャンパス(第1キャンパス)内で飼育している。

平成24年度より、新たに中村克樹を分担機関の代表者として実施した。また、事業の円滑な実施のために霊長類研究所内に推進室を設けた。

実績は以下の通りである。第1の実施項目「ニホンザルの飼育繁殖」に関しては、新たにNBR専属の獣医師を雇用し、さらに充実した飼育・繁殖体制にするよう努めた。平成24年度末の実績として、母群総数が222頭、繁殖育成群が132頭である。ここ数年問題となっていたサルレトロウイルス(SRV)も沈静化でき、現在年間50頭供給可能な体制が確立できたと考えられる。第2の実施項目「ニホンザルの供給実施」に関しては、47頭を研究用ニホンザルとして供給した。より質の高いニホンザルの供給に向けて、供給前の検査の見直し等も行った。また、ライセンス講習会とそれに続く実習を霊長研内で行った。第3の実施項目「ニホンザルの疾病対策と健康管理」に関しては、飼育全頭を対象とした定期健康診断を含む健康確認を実施した。また、SRVを原因とするニホンザル血小板減少症の発症メカニズムを解明するための研究を専属の研究員を中心として実施した。また、分担機関で飼育しているニホンザルだけではなく、中核機関の飼育ニホンザルも含め全頭を対象としたSRV検査を実施した。出荷検査におけるSRVの検査も行った。第4の実施項目「父子判定」に関しては、ニホンザルでは通常分からは